

倫理法人会で学ぶ純粹倫理の特徴は、行為に伴う心の在り方にまで目を向ける点にあります。その心持ちの指標の一つが、今月のテーマでもある「明朗」です。

明朗は、辞書を引くと「こだわりがなく、明るくほがらかなこと。また、そのさま」と記されています。この「こだわりがない」とある通り、純粹倫理という明朗は、いつもニコニコとする表面的な明るさではなく、心の中にわだかまりがない状態を指します。

倫理運動の草創期、昭和二十六年九月末頃、会員の大森金次郎氏は一人息子を亡くし、深い失意の中にいました。息子の最期に立ち会うこともできず、当時の朝の学習会「朝の集い」を欠席するほど憔悴した大森氏。口内はひどくただれ、お茶を飲むこともできない状態でした。しかし、純粹倫理を学んでいた氏は、計り知れない悲しみに対して、「悲しんではいけない、泣いてはいけない」と自分に言い聞かせ、再び「朝の集い」(以下、「集い」)に参加したのです。

その「集い」で、氏は倫理研究所の研究員から、倫理運動の創始者・丸山敏雄先生に指導を受けるよう勧められました。創始者の自宅で、息子の死に対する受け止め方と口内のただれについて指導を仰いだ大森氏の面談は次の様であったといっています。

「あなた、なぜ泣かないのですか？ 泣きなさい」

「こういわれます先生も、思いなしか涙ながらのお声でございました。」



自身の心を見つめ直し 明朗な心境を目指す

「大きな声で泣きましたか？」

「いえ、泣きませんでした」

「なぜ泣かないのですか？」

「先生、私には泣く場所がございません。私が泣いておりますと、家内にも娘にも共に泣かれますので、泣けないのです」

「こうお答え申し上げますその声の消えぬ間に、「隅田川のほとりへでも行って、声を張りあげて泣きなさい。ひとり息子を失って、悲しくない道理がない。思う存分、泣きなさい」

そして、ご子息の死に対して『古事記』の一節を引用した後、次のように大森氏の背中を押したのです。

「これから大森の家が栄えていかなうかどうするか。ひとり息子がしっかりと守ってくれている。安心して、元気を出してしっかりとやりなさい」

その後、氏は創始者の指導通りに川のほとりへ行き、水面に息子の顔を思い浮かべながら慟哭しました。心の中に溜まっていた感情をすべて吐き出したその後、口の中のただれはすっかり治っていたのです。緊張すると足が震えたりするように、心と体は関係し合っています。氏の心の変化は、肉体にも影響を及ぼしたのでしよう。

喜びだけでなく、苦しみや悲しみも、素直にその心に向き合うこと、これも明朗な心を保つ実践といえるかもしれません。人生を歩む中で、時に自身の心のありようをそのまま受け入れ、わだかまりのない状態を目指していききたいものです。